

古代ゲルマン語における文接合に関する一考察

手 嶋 竹 司

(I)

文と文を接合する所謂接続詞の多くはその起源を副詞にもつということは人のよく知るところである。ゲルマン語においても事情は大差なく、今なお接続詞のなかにも副詞としての働きを失わずに保有しているものが少なからずある。それらの史的発展の過程からみるならば副詞と接続詞の両者の間の区別は時に融通と応用の幅をもっている。このようなことから両者のカテゴリーについてこれまでになされてきた形式上の区別をなすことは困難である。本稿では古代ゲルマン語の文接合において非常に特徴的で一種の Anaphora 的な現象とも看做すべき統語法があるが、これは接合されるべき多くの場合二つの文の文頭に首語の反復もしくは相関的対応という文の形式上の手続に加えて、さらにその折一方の側の相関語に軽い不変化詞 (Partikel 以後小辞という) が副えられていることがある。こうした古代ゲルマン語に共通してみられる統語上の特徴とそこにみられる小辞の由来と機能について論究してみようと思う。

統語論的な観点からするならば、この両文の文頭におかれて相関的に両者の間を接合するという方法は古代ゲルマン語に共通する特徴的なもので現代ドイツ語などには今なおその面影を止めており、こうした文論的手続きはゲルマン語の血脈に強く一貫して流れている。この文論的統語手段は言うなれば少々複雑にして多岐に亘る思想内容に直面对峙して自らの論理、主旨の一貫性を失って紛糾昏迷の危険に陥るのを未然に防止し、自らの陳述の組織化のための心理的にも、かつまた言語表現の具体においても統語上の支柱を確保しておきたいという文章心理学的背景に起因するものであると考えられる。こうしたその起源においては一種の文体論上の手順が時間と慣用の経過の裡に徐々に文法的な手段へと進展移行していく道を辿ったものと考えられる。以下に示す古代ゲルマン語の文献からの引用例はこの辺の経緯をわれわれに示してくれるように思われる。

Homl. Th. I. 52, 6

Pider ðe Stephanus forestôp, Pider folgode Paulus
(Stephan のおもむくところへと Paul も後を追った)

Beda Venerabilis : Historia ecclesiastica. Buch IV, kap. 24¹⁾

Pâ hê Pâ Pær in gelimplice tîde his leomu on reste gesette ond onslæpte,
Pâ stôd him sum mon æt Purh swefn ond hine hâlette

(彼が折よく彼の五体を臥所に横たえて、眠りに就いたとき、一人の男が夢の中で彼の前に立ち) はだかり言葉をかけた

Homl. Th. II. 364, 5

Ponne bið us Godes oncwawennys fulfremed, Ponne Pær nan dēað ne
bið, Ponne we God geseoð

(われわれが神の御姿をこの目に見るようなことがあるならば、死というものはなくなるであろうから、そうなったらわれわれの神の知識もゆるぎなきものになるであろう)

Wrenn : An old English Grammar S. 95

nû ic sceal geendian earmlicum dēaƿe……nû wolde ic gebētan

(私はみじめな最後を逃げなければならぬ運命にある今となっては、一途贖罪をしたい心である)

Beow. 1927

ƿēah ðe wintra lýt under burh-locan gebiden hǣbbe, Hæreƿes dohtor ;
næs hio hnáh swá ƿēah

(彼女はその皆にほんのわずかの月日留まったにすぎないけれども、彼女は物惜しみすることはなかった)

Das Wessobrunner Gebet 6

dô dâr niwiht ni was enteo ni wenteo, enti dô was der eino almahtico
cot

(天の果て、地の果てに何一つなかったけれども、唯神のみが在せられた)

Hel. 1424

ēr scal bēðiu tefaran, himil endi erðe, thiu nu bihlidan standat, ēr than
thero wordo wiht biliba unlestid an thesumu liohte

(これらの言葉の一つでもこの世において実現されないままにとどまるならば、今高く聳え立つ
天も地もともに崩れ落ちるであろう)

Libellus Islandorum

ƿá es hann hafƿe hér veret einn vetr eƿa tuá, ƿá fór hann á braut

(彼はこの地に一冬か、二冬滞在した後立ち去って行った)

Isidor V, 11

dhiz ist dhiu sahha christes chiburdi, dhen iudeoliudi, dhoh sie inan
chiboranan chilauben, lastront inan dhoh dhiu hwedheru in cruci chis-
laganan endi dodan

(ユダヤの民はキリストはすでにこの世に生まれてあるものと思っただけでも十字架にかけられ
て死んでいったものと思うが故にその出生を自分たちの恥だと考えるそれが理由である)

O. III. 2, 1

thô Krist in Galilēa quam, ward thaz thô mârî sôs iz zam

(キリストがガリラヤにおいてなられたとき、当然のことながらそのことは人々の知るところ
となった)

O. III. 23, 55

thoh er nû biliban sî, farâmês thoh thâr er sî

(彼はすでにこの世の人ではないけれども、でもその人のおいでになるところへ行こうではない
か)

古代ゲルマンの文献資料からのこれらの例文は文と文の相互の関連と接続をより正確なものにするべく文首を相関的に対応させる方法がとられていることを示している。こうしたところにおいて接続詞なる統語上の文法形式が生まれてくる端緒が窺われるように思われる。

純理論的な立場からの解釈によれば、主文と副文とを区別するものは論理上の独立性とか非独立性、もしくは論理の上での完結、不完結といった全くの論理的性格によるものであ

り、そうした論理によって定義づけられるけれども、そうした論理的特性は文法形式の上に明確な形式の特徴と結びつくものとは限らない。また結合される文と文の接合から生まれる意味の関連内容には種々あって、それが言語の具体に表現され実現される段階でいろいろの表現形式となって現われうる。ゲルマン語の歴史がこれまでに関し、またこれから辿るであろう接合の関係を一義的に截然と表現するのに役立つような手段方法は文化と時の流れとともに次第に開発されて来たとし、今後もその方向に向って進むことは自然の理と云うべきであろう。

(II)

言語によっては主文と副文（従属文）との間に文音調上の差異が認められるものもある。

こうした言語にあっては、両文の区切り目に文調もしくは文旋律によってその接合点が明示される。また他方では、副文ないしは主文のどちらか一方においてのみ用いられる特定の文接続のための形態素をもつような言語も多くある。このような言語では副文の位置なり、副文内での文の要素の配列関係に特殊固有の制約なりがみられる場合が多くある。

さてここで問題をゲルマン語に移して考えてみるならば、現代ドイツ語の副文に特有の導入接続詞と、主文と副文の間の動詞の位置の対立というそれぞれのもつ特性は古代ゲルマン語のうちその胚子が既に形を整えつつあったとみるも強ち過言ではないと思う。

論究を更に進める上にも、その点を指摘しておきたい。上述の文接合の役を務めるべく用いられた首語に立つ副詞の対応という現象にまつわる特徴が、他の場合よりもより明瞭に認められる場合があるので、以下姑くその用法と特性について触れておきたい。それは両文の中にある同じ人称代名詞が、両文に対応する形でおかれていて、しかも同時にこれらの人称代名詞が両文を接合する任務を負わされている。ここには一種関係代名詞的な機能がみられること及びここに用いられる人称代名詞が殆ど例外なく1人称と2人称の人称代名詞であるという点を考え合わせると現代ドイツ語の関係文の一構文上の特性を想起させるものがある。

Ps. Th. 79, 1

ðū ðe Israēla æðelam cynne reccest and rædest, ðū nū beheald

(イスラエルを統べ治める汝はそのことに汝の眼を向けよ)

Beow. 2522

ic ðær heaðu-fýres hâtes wêne, oreðes ond attres ; forðon ic mê on hafu
bord ond byrnan

(私は熱き致命的な憎き火、呼吸と毒を待ち受けなければならない。さればこそ私は楫と楫とを身につけているのだ)

O. IV. 5, 65

firsâhun sih zi wâru zi sîneru ginadu, sô wir ouh iz firnâmun, wir thâr
sidôr quâmun

(彼らはまことにあの人の恩寵に身を任かせていた。そのことは後から遅れて来たわれわれどもにわかった)

この Otfrid の例文について Kelle²⁾は次のような注釈を付け加えている。人称代名詞に添えられた *thâr* は関係接合的な意味を喚起するか、もしくはそうした意味を強めるために用いられることが多いと、しかし今われわれには文接合をどのようにして確保するかが問題の

焦点であり、それが人称代名詞の相関的対応によってなされていることに重きをおくべきであろう。

Beowulf では 3 人称の人称代名詞の場合にもこれと同じ用法があって、両文に相関的に対応する形で用いられている箇所がある。このようなことから総合的に考えてみると古代ゲルマン語では、文頭におかれた首語の相関的対応が文接合の方法としてはかなり一般的であったとみてよいのではなかろうか。

Beow. 2788

he ðā mid Pām mǣðmum mǣrne Piden, dryhten sinne, driforigne fand,
hē hine eft ongon wæteres weorpan

(髻高き宝物を背負い持ちたる人はおのが主君が全身血まみれになりしをみたれば、再び彼に水) を浴びせかけ始めた

ここに現われる小辞 *Pe, the, thār, thō* のことについては後程詳述するのでここでは触れないでおき、さらに例文を列挙することにする。

Tat. 109, 2

ebangeliche tātī si uns, wir thie truogumes burdin thes dages inti thera
hizza

(pares illos nobis fecibisti, qui portavimus pondus diei et estus)

(あなたはその日一日の労苦と暑さを耐え忍んだわれわれと彼らを同じように扱いなさい)

Od. 33

hví ec eptir mác lífi halda, er ec ognhvǫtom unna Þóttomz, sverða
deili, sem síálfri mér

(戦い好きの剣を惜しまぬ君をわが身のように内心愛しく思っておりますのに、このわたしはこれから先どうして生きながらえていられるでしょうか)

Ls. 29

œrr ertu, er Þú yðra telr líóta leiðstafi

(あなたの恐ろしく忌むしい醜行を口にするなんて、あなたは気でも狂ったのですか)

Hdl. 6

flá ertu, er Þú freistar mín

(私をためそうなんて、あなたまちがってますよ)

ebenda 7

dulin ertu, er Þú qveðr ver minn í valsinni

(私の夫がヴァルハラに向って旅をしているとおっしゃるあなたは勘違いでもしているのです)

ここまでみてくるとまずはじめに目にとまることは、第二の従属の文には殆ど常に一つの小辞 (Partikel) が人称代名詞の後におかれているという事実である。そうしたことがどのような理由からなされているのかということ考究してみようと思う。まずこの際次のことに注意を向けてみることは大切なことであるかと思う。上に列挙した例文ではこれまでも述べた如く定動詞の位置の対立ということが往々あるにはあるが、今そのことはさて措くならば、すべて小辞に文接合の役割の多くが負わされているということになる。

従属文の構文を持つ文章構造が並列構文 (Parataxis) から生成発展したものであることは大方の認めるところであるが、古代ゲルマン語の従属の持統詞並びに関係代名詞が副詞及び

指示代名詞から派生転化したものが大半であるという事実から直ちに古代ゲルマンの文献以前の時代には従属の接続詞や関係文は知られていなかったということにはならないのではないか、というのは古い従属文導入の働きをする機能語がここにもみるような副詞や代名詞に出自をもつ新しく生まれたものによって代替されるという結果を招来させたとする事態を考慮に入れて考えてみる必要があるのではないか。印欧語の歴史が教えるように、接続詞や関係代名詞の領域では絶えず入れ替えによる移動が起っている。このような観点に立ってみると、問題の小辞はかつての古い従属文導入の任務を担っていた文法語であったのではないかという推定がなされよう。しかもその小辞は大抵の場合従属文導入の接合の働きをする語に随伴して姿を見せる。そのほか稀に単独で用いられることがある。まずこの後者の単独で使用される場合からみてみよう。

Beow. 2399

oð ðone áne dæg, Pê hê wið Pâm wyrme gewegan sceolde
(彼がかの龍と戦わねばならないその一日の日まで)

ebenda 1333

hêo Pá fæhðe wræc, Pê Pû gystran niht Grendel cwealdest.....
(昨夜貴殿がグレンデルをあやめられたその戦で彼女は……)

Wulf. N. 5, 14

framm Pamma daga ei anabauP mis
(私に命令が下ったそのときから)

ebenda T. II. 3, 8

Pamma haidau ei Jannis jah Mambres andstoPun Moseza
(ヤンネとマンブレがモーゼにさからったのと同じように)

Tat. 147, 12

quimit ther herro thes scalkes in themo tage the her ni wânit inti
theru ziti the her ni weiz
(veniet dominus servi illius in die qua non sperat et hora qua ignorat)
(その僕の主人は彼が予期せぬ日に彼の知らない時間にやって来るであろう)

Hel. 587

an them selbon daga, the ina sâliga an thesan middigard môdar gidrôgi
(母なる人がその聖なる子をこの世に生みおとされるであろうその日に)

Grm. 29

hverian dag, er hann dæma ferr
(彼が裁きをしに行く日はいつも毎日)

小辞のこうした用法から推し測るに、それが以前では単独で従属の接続詞の機能を満す力を具備していて、さらに接合される文と文の間に貫流する意味内容の繋がり具合は両者の連関の次第に依存するという面が大きかったものと考えられる。加えてこの小辞 *Pe* (*the*) は関係代名詞としてすべての性、格にとどまらず数を通じてその役を果たすことができたのである。このことを考え合わせるときこの小辞の来歴及びその由来の古さ、言葉を換えて言うならば、古色を帯びた前代の遺物のようなものであることを窺わせるものがある。それが時代の進展とともに、多様化した意味内容に首尾一貫した論理性を保つ上に事欠く不自由さは忍

びようもなくなり、遂に止むなく、なにか相応の手立てに頼って打開の道を拓かざるをえない事態に立ち至った。そうした事態の解決に緒を与え、さらにこの旧来の老朽化した小辭に活性剤を注射する役を勤めたのがここにみる副詞または指示代名詞による相関的対応の一方に従属的な機能をもたせるべく副えられた小辭であると考えられる。

さて次にこの小辭の語源的考察を加えるならば、目下多くの研究者のみるところによれば指示代名詞の所格 (Lokativ) に出生の起源を溯ることができる。元來代名詞には前出の語を参照し引き合わせる力が具わっている。特にある出来事、過程の発生ないしは行われる時と場所を指示する機能をもつ所格にはこの力は強く感じられたことは論をまつまでもないことである。こうした所格の特性から自らの関係語 (前出語) を内にもつ連結の機能が前面に導き出された。ここで日本語にも似たような現象がみられるので参考までに比較参照してみたいと思う。

日本語の従属の接続小辭「と」はその語源的由来の機能の点でわれわれが問題にしている古代ゲルマン語の小辭 *Pe (the)* と一脈相通ずるところがあるように思われる。日本語の「と」も本来は副詞であり、指示する副詞の「と」と同根の語であろうと大野晋氏³⁾ は岩波の古語辞典の基本助詞解説のなかで説明している。しかもその意味するところは現代ドイツ語の接続詞 *daß, wenn, als* さらに *sobald* といった広い接続の意味領域をもっている。さらには文の中の他の要素に附着してこれを強調する働きも兼ね備えている。なおその他に「と」が「ところ」とか「とき」という比較的新しい接続詞とも起源を共通のところにもつというようなことを考え併せるならば日本語の「と」と古代ゲルマンの小辭 *Pe (the)* と共通するところがさらに大きいことがわかる。

上述のように古代ゲルマン語の古い従属の接合詞は副詞や指示代名詞から新しく生成転化したものによって置き換えられたのは、そもそもその機能するところが徐々に靡げとなり、稜線が不明瞭になったことに起因する。かくして上に挙げた例文中で単独で立てて文を接合しているような用法はその古形と古い用法の投影とみるべきであろう。なお次に挙げるような例文から、より高度の論理性を要する言語の要請に応えるべく、どのような試みがなされたか、またそうした苦境をどのようにして超克するべく手立てを講じたかを知ることができるであろう。以下にそこに打たれた手立てのいくつかを列挙してみよう。

- (1) 相関的に対応する形で配置された副詞のうちその一方に従属の小辭が添加されている。

Wrenn : An old English Grammar S. 96

Pá hē Pá Pās andsware onfēng, ðā ongan hē sōna singan
(彼が返事を受けとるや、すぐに歌い始めた)

Háv. 36

Þótt tvær geitr eigi oc tagreptan sal, Þat er Þó betra en böenn

(二頭の北山羊と木の小枝でふかれた屋根だけしかなくても、物乞いするよりははまだ)

上掲の例文から文接合のための従属の小辭がやがて単なる機能語、文法語の地位に墮した結果新しく生まれた副詞の相関的な対応による方法がある程度文体論的手段の域を脱して習熟固定化されてくると、この小辭は自然とその姿を消していく運命にあった。このようないわば複合的な接合詞が表現形式の上で特有の進展をみせるのは言語の歴史によく見られる現象であり、その複合表現がある程度固定化規範化されてくると、そのうちに弱音化され、意

味及び機能の上でなんらの役割をも帰せられない余剰部分を含むことになる。こうした背景が遠因となって、その贅肉化した部分は消滅の道を迎えることになる。

(2) 相関的に対応するように置かれた副詞のみによって文接合が表示される。

Beow. 484

Ponne wæs Pēos medo-heal on morgen-tīd, driht-sele drēor-fáh, Ponne
dæg líxte, blóde bestýmed

(朝となりて日の光昇り来るとき、酒宴の間は血に染められていた)

Hel. 4358

MútsPELLI cumit an thiustrea naht, al sô thiof ferid darno mid is dádiun,
sô kumid the dag mannun

(ムースペリは暗い夜にやって来て泥棒がこっそりと自分の仕事をもってやって来るように、世
界の終末の日はわれわれ人間どもにやって来る)

O. V. 23, 37

thoh imo iz abwertaz sî, yrwachêt er thoh filu frua

(それ(彼の愛するもの)が自分からどれほど遠くかけ離れていようと彼は朝非常に早く目をさ
ます)

ebenda I. 26, 3

sîd er tharinne badôta, then brunnen reinôta : sîd wachêta allên mannôn
thiu sâilda in then undôn⁴⁾

(その人がその中で水を浴び、この泉を洗い浄めてからというもの、その水につかるすべての
人には幸福がよみがえる)

(3) 文接合の連関関係をより一層円滑明確にする必要から、これまでの旧来の接続小辞に代って、自立し未だ具象的、具体的な意味の世界を表示する力を失っていない副詞の小辞によって従属関係が表示される。このとき従属関係をより明確に表示するために異なった小辞が用いられる。

(a) 時間的な関係を表示するもの

Hel. 3707

sô thô that barn godes innan Hierusalem mid thiu gumono folcu sêg,
thô warð thar allaro sango mêst

(神の御子がお供の者と一緒にイエルサレムにお入りになったとき、声高い歌声がまきおこった)

ebenda 1424

êr scal beðiu tefaran, himil endi erðe, êr than thero wordo wiht biliba
unlêstid an thesumu lihte

(これらの言葉の一つでもこの世で果たされないままに終るようなことがあれば、空と大地の二
つが崩れ落ちることであろう)

O. V. 18, 1

unz sie thâr the stuantun, tharafter luagêtun, thâr stuantun man thô
zuêne

(彼らがそこに立ってその人の後を目で追っていたとき、その場に2人の人が立っていた)

Wessobrunner Gebet 6

dô dâr niwiht ni was enteo ni wenteo, enti dô was der eino almahtico

cot

(そもそのの始まりとか終りとかと考えられるようなものは何一つ存在しなかった。そんなときよりもずっと以前に一人の万能の神がいませられた)

(b) 条件文的に従属する文を導くもの

Beow. 1836

gif him Þonne Hrêþric tô hofum Gêata geþingeð, Þeodnes bearn, hê mæg Þær fela frêonda findan

(フレーデリックがゲーアタスの宮廷へ来るならば、そこに多くの友を見出し給うであろう)

ebenda 1104

gyf Þonne Frýsna hwylc frêcnen spræce ðæs morþor-hetes myndgiend wære, Þonne hit sweordes ecg syððan scolde

(もしフリーズ人の一人でも大胆不敵な言動によって殺害の敵意を思い出さしめたるときは、剣の刃がそれを解決することになるであろう)

Hel. 3403

ef sie thes than ni williad lêstien wiht, thanne ni hôriad sie ôk themu the hinan astâd

(もしも彼らがそれをする意志がないならば、この場所から一人の人が復活しても、彼らはその人の言うことに耳をかさないであろう)

Gen. 207

ef ik thar findo fiftig ferahtara manno, thanna willi ik im iro ferah fargeban

(もしも私が信仰心篤き人を50人見出すならば、私は彼に彼らの生命を預けよう)

Hildebr. 55

doh maht dû nû aodliho, ibu dir din ellen taoc, in sus heremo man hrusti giwinnan, rauba birahanen, ibu dû dâr ênic reht habês

(しかしもしもお前が十分な力をもっているならば、こんな年老いた戦士から武具を勝ちとることができし、もしもお前がそれを要求する当然の権利をもっているならばそれら戦利の品々を自分のものにすることができるのだ)

(c) 譲歩文的な従属文を導入するもの

Hel. 537

thoh thar than gihwilic hêlag man Krist antkendi, thoh ni warð it gio te thes kuninges hobe them mannun gimârid

(そこでは多勢の聖なる人がキリストを認知したけれども、このことを王の部下には伝えられなかった)

Þrk. 4

Þó mynda ec gefa Þér, Þótt ór gulli væri

(もしもそれが黄金でできていようとも、私はあなたにそれをあげましように)

(d) 名詞文的な従属を示すもの

Homl. Th. I. 190, 22

Þæt ðe on him heora eagan gedydon, Þæt deð ûre geleafa on us

(彼らの目が彼らにしたところのこと、そのことをわれわれの信仰心がわれわれにくれる)

Beow. 1255

Pæt gesýne wearþ, wíð-cuþ werum, Pætte wrcend Pá gýt lifde æfter láPum

(恐ろしく憎きものが死んだ後になおも一人の復讐者が生きながらえたことが戦士たちに明らかとなり、広く人々に知れ渡った)

小辞のこうした具体的な用例から今われわれは言述の明晰性と首尾一貫して流れる論理性を確保し維持することに神経を砕き苦心した古人の努力が偲ばれる思いがする。

なお今一つわれわれの問題にとって見逃すことのできない重要な事柄があるので、それについて考察を試みてみることにする。人が自らの言述の意味内容がかなり輻輳・錯綜している、条理を一貫させることがなかなか難しく、聞く人をして難解・難渋・当惑させるというような不安をもつようなときに、どのような手立てを講じてその打開に当たったであろうか、その辺の事情をわれわれに告げ知らせてくれるような例文があるのでそれを見てみよう。

Blickl. Homl. 225

Pá hē Pá hæfde Pone hired gesibbodne ond Pæ̅r dagas wer manige wæs, Pá hē Pá eft mynte tō his mynstre feran. Pá wearð hē færinga swiðe untrum

(彼が宮廷の人々と互に仲直りし、そこの人々の間で多くの日を過し修道院へ再び戻りたいと思いい始めたとき、彼はにわかにな病気になる)

Beow. 1095

Pá hīe getrwedon on twā healfa fæste frioðu-wære. Fin Hengeste elne unflitme āðum benemde, Pæt hē Pá wēa-láfe weotena dōme ārum hēolde, Pæt ðæ̅r ænig mon wordum ne worcum wære ne bræce

(かくして彼らは双方において固き和約を結んだ、フィンとヘンゲストに対し固い誓いの言葉で彼に戦いの生存者らにその土地の古くからの慣習に従って長く敬意の念を忘れることのないことと、いかなる人々といえども言葉や行動で条約を破るようなことは決してないであろうことを誓った)

Hel. 1217

thō fōrun thar thie liudi tō allaro dago gehwilikes, thar ūsa drohtin was selbo undar them gisiðie, untthat thar gesamnod warð meginfolc mikil managaro thiodo

(有力な人々の群が多くの民族から呼び集められてやって来るまで、群衆の中にわれらが王御自身身が御滞在になったその地に毎日多くの人々がやって来た)

ebenda 174

bidun allan da that werod for them wiha endi wundrodun alla, bihwī he thar sō lango, lofsálig man, swiðo frōd gumo fráon sīnun thionon thorfti, sō thar ēr ēnig thegno ni deda, than sie thar at them wiha waldandes geld folmon frumidun

(夕方まで教会の前に群衆は居残った。そして彼らが主の教会で彼らの手で生贄の品を持参して差し上げたとき、これまでかつて召使たるもの誰一人としてしたことがないほど彼らの主人になぜあれほど長いこと奉仕するのだろうかと思案ともは不思議に思った)

これらの例文から上に述べたような苦心の程は瞭然と看取できることと思う。上掲の例文一つ一つについて詳述することは割愛することにして、上記例文に附せられた訳文をみればそれぞれの陳述内容が、主文と副文の入り乱れたかなり複雑な構文になっていること及び、そうした内容に対する統一と条理の保全への配慮が読みとれることであろう。文相互の連関

と意味内容の通貫の仕方などは下線の施された小辭の配置から推察されよう。そこにはこれまでの旧来の単一の *Pe* (*the*) のみによる接合に比べるならば文と文の間の関連と主旨の一貫明晰性がより明確に表現にもたらされていることがわかる。さらに加えて、上にみたような首語である副詞などの相関的な対応的配置による接合に比してより一層合理的な文接合の方法がとられている。これなども上述の努力と苦心を物語る証拠とみてよいのではないだろうか。これすなわち換言するならば微かな余命しか保っておらず、しかも意味も機能も忘れ去られ無用化した古代の遺物に代って接合関係を一段と明確化しようとはしたものの、そこに打たれた手立ては旧態依然、時間とか場所を示す指示的な副詞の力を借りざるを得なかった。ここに言語に具わる遺伝的伝統的な強靱な *Treibkraft* を感得するのである。すなわち、ここに用いられている小辭が旧来の *Pe* と語根並びに意味領域において類縁関係にある副詞であるということは、その背景をなす心理と言語感覚が依然命脈を保って脈動を続けていることの証左であろう。かくの如くそもそもの初源においては心理的文体論的手続きから生まれた文接合の方法がやがては慣用を通じて徐々に接続詞という新しい文法的手段へと移行していったものと考え⁵⁾。

(III)

言語が自らの論理的整序を志向するという傾向は人間言語に本質的なものである。そしてこの傾向は言語が外からの刺戟もしくは、内からの内面的必然により、より高度の表現形式を求める必要に迫られたとき、そこに敏感に反応する。その際一時的に乱れがみられるものの、これまでみてきたような心理的、文体論的必要に対応すべく表現形式の過剰性を生むという結果になり易いが、やがて慣用を通してそれが固定化され規範化されて文法体系のうちに組み込まれて均衡安定した状態を取り戻す。それにはそこに一時的に出来た余剰性は自然に淘汰されて、最初精神面に課せられた負荷は減少される。

ゲルマン語の歴史を通して、目指し志向する文意にかなった文接合へと言語の可能性と適応性を開発する試みや努力は絶えずなされている。そうするなかで可能なかぎり一義的で有効な手段が常に生み出され案出されて表現形式の増進がすすめられてきたし、現在もなお個々の言語はこの方向に向って営々その努力を怠ることがない。人間言語の歴史は一方においては論理的表現形式の追求であり、他方では表現面での表現内容の圧縮、表現形式の多層多重化であり、またその反作用として煩瑣な文章構造を超克し明瞭化と迅速化へと向う不断の努力の歴史でもあり、こうした相拮抗する衝動と志向の連続であると言うも敢えて過言ではあるまい。先に述べたようにそうするなかにも言語経済へと向う力が作用していることも見逃してはならない。

言語の体軀内には言語に生来具わった活力と *Treibkraft* が脈動している。そうした底流を流れる活力が頻死の危機に喘ぐとき言語は幾度となく新たな活性剤を注入することによってその生命力を強靱に維持し続けるのである。

本稿において論じ来った古代ゲルマン語の現象もそうした言語の本質に根ざした作用の顕われであり、中世ドイツ語にもその余勢は続いている。例えば古代ドイツ語の時代に指示代名詞の中性形から生まれた従属の文を導く小辭 (*daz*) は

unz daz

bedaz

nu daz

ê daz

などの副詞もしくは副詞的な表現の接続詞的な利用の支えとしての役目しかもたないものになり下っている。

Nib. 2174

bebaz der videlære die rede vol gesprach, Rüedegêrn den edelen man vor dem hûse sach

(まだながしの楽士が話を終えてしまわないうちに身分たかきリュエデゲールが館の前に姿を現わすのがみられた)

Wa. 15. II, 3⁶)

sît daz diu minneclîche minne alsô verdarp, sît sanc ouch ich ein teil unminneclîche

(真実の愛が地に墮ちてしまっただけからは私も歌を歌ってもさほど楽しくもありません)

これらの中世ドイツ語からの例文を古代ゲルマン語からのこれまでの引用例と比較するならばこれまでの論述がさらにはっきりしてくるように思う。

Wulf. L. 7, 1

biPe Pan usfullida alla Po waurda seinâ in hliumans manageins, galai in Kafarnaum

(じっと話を聞いている聴衆の前で話し終えてから、彼はカペナウムに向って行った)

Iw. 7727

nû was der lewe ûz komen, als ir ê habent vernomen, dâ er dâ in versperret wart

(ところで汝らが以前に聞き及んでいるように彼が閉じこめられていたところにはライオンがいた)

aH. 1495

als ie die liute tâten, dâ sî dâ solten râten

(忠告しなければならぬようなときになると人々がいつもしたことなのだが)

Iw. 7392

ich minnet unz an dise vrist den tac vûr allez dazder ist

(私は今日の日にいたるまでこの世にあるいかなるものよりもこの日が好きであった)

Trudp. HL. 11, 19. 20

nû waz wirt unsir armin wir dâ gekussit unde gehalset habin unde gesungen?

(接吻し、抱き合って歌を歌い合ったことのある私達だが、あわれにもこの先どうなることか)

Ezzos Gesang 7

dô sih Adam dô bevîl, dô was naht unde vinsten

(アダムが楽園を追われて身を墮したときは夜で真暗の闇であった)

次に挙げる中世ドイツ語からの例文中では *daz* はそれが導入する文が従属する文であることを示す単なる記号でしかなく、しかもこの *daz* 文章が上位中の一文肢を規定するいわ

ば関係文的に上位文に倚りかかっている。これにはその用法と機能の両面において古代ゲルマン語の小辞 *Pe (the)* と一脈相通ずるところがある。

Pz. 645, 5

âne sorge ich nie beleip sît des tages daz ich sach die hant von der diu
schrift geschach

(この前この手紙を書いたお方にお会いして以来ずっと私は心配が絶えなかったのです)

かくして小辞は徐々に自己の機能するところを消失して、意味論的価値を喪失してしまうに至る。ついでは単に文を接続する上での支えとして附随的に副詞ないしは副詞的な表現形態に随伴する。ところがその副詞の方が文を接合する接続詞的な機能を担い受ける力を持つようになる。これを中世ドイツ語について言うならば、中世ドイツ語の状態は副詞かまたは前置詞から新しい接続詞への移行の過程にあることを示すものである。やがて中世ドイツ語においてもこの小辞 *daz* は副詞が接続詞としての地位を確保するやその任務を放擲し姿を消してしまうことになる。

最後に結論風にこれまでの論述を要約しておく。古代ゲルマンの各言語はギリシャ・ラテンの古典古代の文化との接触やキリスト教への回宗、布教伝道というこれまでに経験したことのない未曾有の文化史的・歴史的事件に直面して、これまでの口頭による伝達形式のみに頼っていた言語活動から俄かに書記言語による伝達と発表、文化の伝授という伝達方法の一大変革期を迎えることになった。このときにあたって、そうした事態に対応すべく表現形式の一大開発をせざるを得ない状況に追い込まれていることを自覚するに至った。そこでこの緊要な事態に対処すべく講じられた手掛りであり、その起源においては文体論的心理的な統語上の形式である相関的な対応の配置という手段に訴えることによって文接合の役を務めさせることができた。しかしこの際にも言語の血脈に流れる生来の本質的な力に援助の手を借りない訳にはいかなかった。すなわち指示詞に来源をもつ *anaphorisch* な小辞に文接合の機能を負わせ従属の文を導入する力を付与した。さらに文接合の関連の仕方が複雑錯綜するに及んでその間の連関をとり明確にする必要から、副詞などによる相関的な対応によってその責を満たすことにはなつたが、そこにも初めは以前からの小辞に頼らざるを得なかった。このようにして人間言語の表現力は精緻になり、微細なニュアンスを表現面にもたらしめべく不撓の力が働いている。言語はこのようにしてふくらむ遺産を自己の財産のうちに包蔵し拡張進展していくが、そうした進行過程において言語は常に遺伝的な素性に沿って自己に具わる伝統的な財産目録の中から有効な手立てを選びとる。同じような動機と機運から同巧の手を遣うという現象は言語の歴史によくみるところである。

Zusammenfassung

Die Beschäftigung mit der klassischen Kultur und die Bekehrung zum Christentum hat den Drang zum Übergang von der bisherigen nur mündlichen Mitteilung zur schriftlichen Beschreibung mit sich gebracht. Angesichts dieses dringenden Zustandes sah man sich gezwungen, dazu irgendeinen entsprechenden Maßnahme zu treffen. Dazu wurde die stilistisch-syntaktische Korrelation verwandt, wobei sie als konjunktionale Stütze der unterordnenden Partikel von pronominaler Herkunft

bedarf. Aber ferner sind verschiedene Partikeln erforderlich, um die verschiedenen Verhältnisse zwischen den Aussagen deutlicher zum Ausdruck zu bringen, das heißt mit anderen Worten: um nach dem Inhalt den abhängigen Satz näher bestimmen oder nachdrücklich auszudrücken. Dabei greift die Sprache gern zum Material aus ihrem eigenen Bestand, der ihr von Haus aus gehört.

(註)

- 1) Lehnert, M: Altenglisches Elementarbuch. Sammlung Göschen 5125
- 2) Kelle, J: Glossar der Sprache Otfrids. S. 590 見出語 "thâr (副詞)" のところを見よ。
- 3) 大野晋: 岩波古語辞典 1457ページ (基本助詞解説の部参照)
- 4) さらに次の例文を比較参照

O. IV. 20, 25

er es êr io nirwant, êr er allaz thiz lant gidruabta harto mit sines
lêru

(彼はこの国土を自分自身の手引きでもって混乱におとし入れるまでは気の休まることはなかった)

- 5) 古代ノルト語の *er* はゴート語の接続詞 *Pei, Pe, Pô* (古代西ゲルマン語の *Pe, Pâ, Pô*) 及び同じくゴート語の *Pan* (古代サクソン語の *than*, 古代英語の *Pon, Ponne*, 古代高地ドイツ語の *danne*) を併せた意味領域をもつ接続詞で、古代ノルド語の *Pá* は唯単なる副詞であるので従属文を導入するには支えとしてこの *er* を必要とした。

さらに次のことを考慮に入れて考えてほしい。

古代英語の

Pætt, Pætt が *Pætt* と *Pe* (小辞) の縮約形であること、ならびに *Pæss Pe,*
forPon Pe (例えば *forPon Pe hê neûPe*: 彼は惜しまずに与えなかったので)

古代ノルト語の

Pótt ("obwohl") が *Pó at* の縮約形であること。

古代ノルト語の *er* はいろいろの副詞と結んで従属の文を導入する支柱としての役を果たす。例えば

<i>Pegar er</i>	"sobald als"	...
<i>nú er</i>	"als nun"	
<i>siPan er</i>	"seitdem"	
<i>Par til er</i>	"bis daß"	

またドイツ語についても同じようなことがみられる。中世高地ドイツ語では、なんの意味論的な価値も持たない *daz* が接続詞的な支えとして副詞に添加されている。

sit (daz)

nu (daz)

ê (daz)

die wile (daz) など

さらに現代ドイツ語からは

nachdem

trotzdem

seitdem

indem

などの接続詞がみられるがこれらの語に附着された *dem* は単なる接続詞的な機能を示すために添

えられたものである。これらの副文導入のための接続詞ではそこに附着された指示詞は関係的であるという働きを継承しているにすぎない。なおさらに次のことに注意してほしい、というのは中世高地ドイツ語の時代まで少数の場合を除いては Instrumentalis (具格) は消滅してしまったけれども代名詞の中性単数形だけは残った。そしてこの中性単数形がいろいろな場合にやはり従属の文を導入するための支えの役をなしているということと併せて、ゲルマン語ではこの Instrumentalis の大部分は前置詞と与格という形式によって代替されていることなどに想致されよ。

- 6) Walter von Vogelweide Gedichte Mittelhochdeutscher Text und Übersetzung. Fischer Bücher des Wissens Nr. 6052 (ausgewählt, übersetzt und mit einem Kommentar versehen von Peter Wapnewski)

略語説明

aH.	Der arme Heinrich von Hartmann von Aue
Beow.	Beowulf
Blickl. Homl.	The Blickling Homilies, edited by R. Morris
Gen.	Genesis
Grm.	Grímnismál
Háv.	Hávamál
Homl. Th.	The Homilies of AElfric, edited by B. Thorpe
Hdl.	Hyndlolióð
Hildebr.	Hildebrandslied
idg.	indogermanisch
Iw.	Iwein. Eine Erzählung von Hartmann von Aue
L.	Lukas-Evangelium
Ls.	Locasenna
mhd.	mittelhochdeutsch
N.	Nehemias (das alte Testament)
Nib.	Nibelungenlied
nhd.	neuhochdeutsch
O.	Otfrids Evangelienbuch
Od.	Oddrúnargrátr
Pron. pers.	Pronomen personalis
Pz.	Wolfram von Eschenbach, Parzival
Ps. Th.	Libri Psalmorum, edited by Thorpe
T.	Der Brief des Paulus an Timotheus
Tat.	Tatian
Trudp HL.	Das St. Trudperter Hohe Lied
Prk.	Þrymsqviða
Wa.	Die Gedichte Walters von Vogelweide
Wulf.	Wulfilas Gotische Bibel

I 刊 本

- Althochdeutsches Lesebuch. W. Braune, bearbeitet von Ernst A. Ebbinghaus. 15. Auflage, Tübingen 1969
- Beowulf. H. Heyne, 18. Auflage besorgt von L. L. Schücking Paderborn 1962
- Die Gotische Bibel. W. Streitberg. Heidelberg 1950
- Edda, Die Lieder des Codex regius nebst verwandten Denkmälern. G. Neckel, 1. Text 4. Auflage, Heidelberg 1962
- Heliand und Genesis. O. Behaghel, bearbeitet von W. Mitzka. 8. Auflage. Tübingen 1973—Altdeutsche Textbibliothek. Nr. 4
- Das Nibelungenlied. Helmut de Boor, nach der Ausgabe von Karl Bartsch 21. Auflage, Wiesbaden 1979
- Iwein. G. F. Benecke, K. Lachmann und L. Wolff. Übersetzung und Anmerkung von Thomas Cramer. 2. Auflage 1974
- Otfrids Evangelienbuch. O. Erdmann, besorgt von L. Wolff, 6. Auflage, Tübingen 1973—Altdeutsche Textbibliothek. Nr. 49
- Tatian. Lateinisch und altddeutsch. E. Sievers, 2. neubearb. Auflage, Paderborn 1892

II 参 考 文 献

- Bhaghel, O. : Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung. 4. Bde. Heidelberg 1928
- Ebert, R. P. : Historische Syntax des Deutschen 1. Auflage Stuttgart 1978—Sammlung Metzler; M 167
- Erdmann, O. : Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids. Halle 1874. — Nachdruck der Ausgabe Halle 1874—77. Georg Olms 1973
- Hirt, K : Handbuch des Urgermanischen. 3 Bde. Heidelberg 1934
- Havers, W. : Handbuch der erklärenden Syntax. Heidelberg 1950
- Paul/Moser/Schröbler : Mittelhochdeutsche Grammatik. 20. Auflage Tübingen 1969